

<はじめに>

人を埋葬した墓には土葬墓と火葬墓があります。土葬は原始時代から始まり、火葬は古代から仏教の影響で上層階級より普及するようになります。庶民には中世から徐々に普及し、近世で再び土葬に変わるといわれています。今回は可児市の今渡遺跡発掘調査の成果から、中世から近世にかけての庶民の墓地の変遷について紹介します。

<人骨に見られる土葬と火葬の違い>

まず墓を発掘したとき、埋土から炭化物や焼土などが発見されれば火葬墓だと想定できますが、さらに人骨が出土すれば、より正確に判断する手がかりになります。

死後まもなく火葬されると、水分を含んだ骨が 15～30%程収縮し、表面は亀裂や歪み、捻れが生じ、硬化します。火葬時の焼成温度が 700～900℃の場合は、色調は明灰色から白色となります。逆に歪みや捻れが認められない骨は、焼成温度が低い時や白骨状態で火葬された場合と考えられます。(檜崎 2008) また、百年以上埋葬されていた土葬墓内の骨は明黄褐色で腐食した木片のようにもろく崩れやすくなっていることで判別できます。

<人骨から年代を分析>

墓の変遷を探るためには、墓の年代を確定する必要があります。通常は死者と一緒に埋納された遺物から判断し、年代順に並べて墓の特徴を導き出します。しかし、遺物が出土しないこともあります。この場合には、骨そのものを用いて科学分析による年代測定法を活用します。

土葬墓では骨内に含まれるコラーゲンを、火葬墓内の骨は無機質化しているので炭酸塩を抽出して分析します。今渡遺跡の調査では 2 基の分析を行い、火葬墓で 15 世紀前半 (1409～1440)、土葬墓で 17 世紀中頃 (1630～1662) という結果が出ました。(株) パレオラボの分析による)

<火葬墓 (中世から近世初め) >

検出した遺構や出土遺物を整理・分析した結果、最も古い墓は 15 世紀前半の火葬墓であり、火葬の風習は 17 世紀中頃まで続くことが判明しました。火葬墓には蔵骨器もなく、焼骨を埋納するだけなので、比較的小さく浅く掘られた楕円形の墓でした。また、1 基だけ底面に円礫を敷いた墓を検出しました。埋土中からは多量の焼骨や炭化物が出土し、土坑北側壁面には被熱痕がありました。礫表面にはタールがこびり付き、四隅から鉄釘が出土していま



火葬墓 (土層断面、北東から)

す。鉄釘の出土位置から考えて 70 cm×50 cm 程度の棺桶であることが判明しました。底面に置かれた円礫は、上に棺桶を置くことで火葬時の通風を良くする工夫だと考えられます。出土した骨片で判明した部位が少ないため、火葬されたのが単体か複数体かはわかりませんが、判明した部位に頭骨や大腿骨などの主要な骨片が含まれていることから、この遺構では火葬後そのまま埋葬されたものと考えられます。出土遺物から 15 世紀中頃であることが判明しました。



火葬墓 (火葬施設、南西から)

<土葬墓 (中世末から近世) >

今渡遺跡では、16 世紀末から土葬墓が現れます。土葬墓は遺体をそのまま埋葬するため火葬墓より大型になります。全長 0.8～0.9m、幅 0.5～0.6m、深さ約 0.4m 程に掘り込まれた楕円形の墓です。上面にのみ礫が並べられていました。18 世紀代になると長さ 1 m～1.3m、幅・深さ共に 1 m 前後の隅丸方形の墓になり、やがて円形に変わっていきます。地面を掘り起こして出た土や多量の円礫はそのまま乱雑に埋め戻しています。底面は砂礫層まで達しているため、自然礫が露出しています。



土葬墓 (土層断面、北東から)



土葬墓 (北西から)

これらの墓の形状変化は、埋葬形態の変化によるものと考えられます。

<おわりに>

今渡遺跡周辺は田園風景が広がる景観でしたが近年の開発により大きく変貌しました。15 世紀に墓地として利用され始めてから 500 年余、現在もなお遺跡の隣接地には霊園が営まれ墓地としての利用が継承されています。

<参考文献>

谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社
檜崎修一郎 2008『研究紀要第 26 号』「群馬県内中世火葬遺構出土火葬人骨と火葬人骨」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団